

雜 纂

大塚退野の生涯と其の著書

文學士 今 村 孝 三

甚明に御坐候間、治國の道尤以會得いたし候、代々世祿の人にて候え共、時の否塞に逢ひ、終に用ひられ不申、乍然老年に至り候ても國を憂へ君を愛するの誠彌深切に有之、眞儒にも可申人物に御坐候、一拙子本意專此人を慕ひ學び候事に御坐候、

ど。明治天皇の侍講元田東野は小楠の親しき弟子にして朋友なり。彼れ曰く、

熊本に於ける實學派の泰斗横井小楠は維新前後の一大人物なり。識見高遠、氣宇濶大にして一代の木鐸、百世の師表、東亞の偉人と稱すべしと云はる(小楠先生碑文)。世に行はるゝ小楠遺稿一卷は彼れの著書、建白、書翰、語録、詩文等を蒐集編纂せるものなり。中に彼れより久留米藩の教授本庄一郎に與へし書翰あり。一節に曰く

退野天資の高のみならず、修養の力格別に有之、知識

の歴史的觀察)

と。東野古今の英烈忠賢を賦しけるが、退野とその弟子深淵を詠つて曰く

淡水深千尺、博溥淵泉不可測、滄之不濁剪無痕、宛與
延平合其德、誰傳其道孤雲翁、程易真理妙心通、平易
之中神機發、渾厚之底包豪雄、致君堯舜平生志、浩歌
打缶符命終、海門名儒可屈指、道德真傳誰耶是、嗚呼
非林非伊又非崎、吾服東肥兩夫子(講筵餘吟)

と。此くの如く小楠、東野が口を極めて推賞せる退野は如何なる人物なるか。

二

退野は大塚久成致仕後の號なり。久成幼名を又十郎と云ひ、二十一歳の時藤左衛門と改め、四十一歳の時更に丹左衛門と改む。號は初は蹇齋と云ひ、後孚齋と改め、最後に退野を稱す。退野の號を撰べるは中瀬柯庭なり。延享元年十一月十六日

退野より柯庭に與へたる書翰に曰く

退野の字御考下されは亦忝奉存候、御思召付至極心付、其儘用申候、猶更出處も御座候て別て本意に叶申候

と。

細川幽齋に用ゐられし武士に大塚又左衛門久世なる者あり。將軍足利義輝の自殺せる時、幽齋その弟義昭を幽閉中より救ひ、織田信長に依て回復を謀り、信長永祿十一年九月義昭を奉じて京師に入りしが、此時久世始めて幽齋に仕ふ。大阪の役田邊城を守つて屢々戦功あり、祿百五十石を賜はり文祿元年三月細川氏朝鮮征伐の先鋒となるや、彼れ軍監に任せらる。久世の嫡子源次郎義久忠興に仕へ、關ヶ原の役には孝之に従つて屢々功あり、元和七年百石を加賜さる。寛永九年十一月忠利豊前より肥後に移されし時、彼れ小倉より従つて熊本に來る。その子甚右衛門久時十六歳にて忠利に

近侍し、寛永十五年正月島原の亂の際、忠利肥前有馬を攻め、久時從軍、先登の功あり。その子七右衛門久隆は御番方組脇となる。久隆は即ち退野の父なり（大塚氏系）。

退野は延寶五年（一六七七）閏十二月熊本に生れ寛延三年（一七五〇）三月五日玉名郡玉名村に歿す時習館の開かれし寶曆五年より五年前にして、細川中興の明君銀臺公重賢の代なり。彼れ九歳にして始めて綱利に謁し、十二歳にて首服を加ふ。兵法を學んで屢々恩賜あり、二十二歳家督を繼ぎ、御切米奉行となり、後二年御地方組脇に任じ、延享元年（一七四四）致仕、玉名郡玉名村に退隱す。時に齡六十八歳なり。

在職中の事績は未だ之を詳にせず。致仕の原因亦明かならず。老齡の爲め職を辭したるものと思はる。小楠の書中「世々世祿の人に候へ共、時の否塞に逢ひ、終に用ひられ不申」とあるも、彼れ

自身は致仕を悔まず、之に對して不滿なかりしが如し。即ち小森七太夫に與へし書に曰く

頃日隱居家督の儀も御聞、是又御歡御狀被下相達忝致拜見候、一世の案堵、此事に御座候、則名をも改めて退野ニ號申候、此後は熊本へ出府もはゞかりに候間！

かうふりをかけて退く身になれば

むなしくかそふ月日なりけり

御一笑く

と。又栗崎履齋に與へし書には「如仰野夫先般遂致仕、生前の活計、此事に御座候」とあり、前記柯庭に與へし書にも「致仕を御賀し被成、御詠歌被下別して、不淺忝奉候」とあり。是等は彼れが致仕の消息を物語るものと思はる。七太夫への書面中「此後は熊本へ出府もはゞかり候云々」とあり、はゞかり候の句を如何に解釋すべきかは問題なるも、余輩は只謙遜遠慮の言葉と解釋す。

致仕より歿するまで七年、専ら門人を教へ、熊

本の朋輩來れば共に學を講じ、時には熊本に出で
なごしてその餘世を送る。詩を賦して曰く

退野、菴中安樂身、老來無事逆新春、孤棲花盛鶯猶囀、
天柳枝垂風又馴、閨巷煙濃家遺難、朝廷禮正各思貢、
聖時難遇更何慮、眼裡山川効智仁、

と。履齋に答ふる書には云ふ。

老境心力薄く精微の處には分辨さ、き不申、然こも致
仕已後外境を絶申、故心地は安穩の意思、御座候。

身體が強健なりしか又は虚弱なりしかは之を詳
にせず。師友に送りし書翰には腹痛を告げて療法
を問へることあり、その他病氣の事を報せるもの
もあれど、可成長命せしことなれば、身體虚弱な
りし方にては無かりしならんと思はる。然るに寛
延元年十月「透克齋渡瀬秀才游學於京師序」には次
の言を發す。

老衰、病患不能作文、直寫舊稿之篇以送、吾子其勉哉、
嗚呼余齡過古稀、此行期七年、不可得再會也必矣、復

何言哉復何言哉

次の年の春

七、十三年安樂春、東風到處柳條新、雪殘山谷ト喜瑞、
雲映落暉洗俗塵、貧窶自堪甘藜藿、官途既謝着眞布、
老來何事累心境、七十三年安樂春

と吟せしが、翌年遂に歿す。享年七十四歳なり。

三月二日見舞へる門人森省齋に向ひ「今にありて
天の與ふる生命の義のみ思ふ故に外の事何とも無
い」と云ひしと（退野語録）。辭世の歌に曰く

渡り越し浮世の橋の跡見れば

さても危く過しもの哉

退野性着實にして虚飾を好まず、死後牌文を立つ
る勿れ、墓も大にする勿れと云ふ。小墓は熊本市
萬日山下長谷に在り、碑文の類なし。傳ふる所に
よれば臨終の折「予が玉の緒もやがて絶ぬべし、
心安く終るべし、只事の心に懸るは先の比會津屋
孫兵衛より金借り侍るなり、彼も今は忘れやしつ

べけれども返さるること念なし」と云ひしと。(木村某の草野潛溪傳) 彼れの生計裕ならざりしを物語るものと謂つべし。

退野の室は吉田氏なり。五郎助久保、豐子、類子を生む。久保家を繼ぎ、藤左衛門久祥、太膳久明、甚右衛門久房、米之助久政、勉男久敬を経て昌久に到る。嘗て姫路市長たりし大塚武臣、現愛知縣立第五中學校長大塚末雄氏は退野の後裔なり。

三

退野は初め陽明學を學びしが、後朱子學に轉じ、領る精奥を極め、終生之を奉ず。曰く、

吾世、八より程朱の學に志す、其前陽明の學を信じて良知を見るが如くにあり、然れども聖經に引合て平易ならず、竊に疑を起す、然して自省録李退溪著を讀み、内々

程朱の學の意味を曉り、始て志し候なり、其比同齋も陽明の學を廢して程朱の學を信ぜらる、由を聞き、遂

て語り侍る(退野語錄)。

と。孚齋存稿中にも此の事を述べ「不復他求、將終此生」と云ふ。或人大學格物の說朱子の說と王陽明の說と異なる故、何れに従ふべきかと問へる時、彼れ答へて云ふ。

陽明は格物の訓のみ異なるにあらず、全體の學聖明の教に叶ひ不申候得ば、從ひ可申様もなく候、朱子の學は程子の流を得て全體大用悉く聖門の教にかなひ候得ば、格物の說も博文約禮、明善誠乎身、博學審問、慎思明辨篤行、學而時習之等の聖語に其道一なり候得ば、うたがふべき程もなく候、専ら篤信じて力め行べき事必然に候、(體驗說)

陽明を排し朱子を遵奉せし一例なり。

退野が陽明學より朱子學に轉じたる動機につき自らは陽明學説く所聖經に引き合せ平易ならず、竊に疑を起せる時、朱子書節要(自省録)を讀み、遂に朱子學に轉すと云ふ。朱子書節要は藪慎菴が「百

世之下、繼_ニ紫陽之緒_一者、退溪其人也」と推稱せる朝鮮の學者李退溪の著なり（孤山遺稿所載送赤彦禮序）。退野此の書を讀み、朱子の心を獲たりと云ひ、之を信すること神明の如く、之を尊ぶこと父母の如くなりしと、（中村持實與芳賀某書）。後此の書を讀みし時、書を柯庭に贈つて云ふ。

自省錄一看仕候、久々にてよみ申候、ますく退溪の學の至不可測_ニ奉存候、此人なくんば紫陽の徵意不明して俗學_ニなりかわり候事_ニ奉存候、

と。門人に之を熟讀すべき事を勸む。

門人赤松助次郎の言によれば、退野が朱子學に轉せる動機、年齢退野の云ふ所と異り。池松記錄に曰く、

退野翁は二十六歳迄は陽明學を致されけるに、常に良知を宗_ニし、心を練り、靜坐のみなりしかば、いさ暗き夜にも、二三十歩が間の垣の繩の結目なごも明に知れければ、是は以の外の事なり、斯ありては狂氣の懼

ありて、夫より程朱の學に變ぜられしと、助次郎語りしとぞ、

要之、退野の旨とする所は知行合一、躬行實踐なり。熊本に於ける實學派の泰斗横井小楠、その親友元田東野、萩昌國等甚だ退野を慕ひ、その道を傳ふ。實學の名稱退野の學より來れりと云はる。

（内田周平熊本學風の歴史的觀察）

四

退野の師に就きては余輩未だ之を詳にせず。池松十内の筆記に「孛齋は牧某先生の門に學べり」とあり。牧道齋ならんかと思ふ。道齋名を正房、通稱を七郎右衛門と云ひ、同齋或は道史とも號す。

（一七二三歿）長子を春野（八郎右衛門古意）と云ふ。退野春野に與へし書中に曰く

久成_（韋公_）（道齋）の恩を蒙り候事他人に異り賢者（春野）を補翼すべきの貴有之云々、

と。池松十内の筆記と此の書翰とより考へ、退野の師は道齋なるべきかと思ふ。

退野の友に藪愼菴あり。(一七四四歿)名は弘篤、久左衛門と稱し、初めの號を震菴と稱す。秋山玉山の後をうけて時習館教授と爲りし藪孤山の父なり。退野性狷介にして世と合はず、友を求むること切なりしも、容易に得ざりき。時偶々愼菴を友とすることを得、志同心契、相與に切磋琢磨して朱子學を研究す(銀臺遺事、祭藪震菴文)。年齢は退野長ず。彼れは年齢の長少を挾まず愼菴を友としたりしが、愼菴は退野を視るに友を以てせず、待つに師を以てす。稗田弘齋に與ふる書に曰く

弘篤不端、其十七八志于學矣、幸獲牧大家、无生之教と。彼れ畏敬せる者五人あり、即ち退野と萱野考澗と氏家復齋に牧確齋と中瀬柯庭なり。(孤山遺稿所載中瀆柯庭七十叙)彼れより退野への書翰には常に先生の文字を使用す。退野悦ばず、之を改め

んことを求む。答藪震菴書に曰く

來教有先生二字、恐是出于一時之私意、而非公言也、重賜手教、則除去此二字而可也、若不然非朋友有信之道、伏請改之、

と。愼菴は退野致仕の年卒し、退野祭藪震菴文を作つて之を弔す。

退野の門人は百餘人に及ぶ。獨り藩士のみならず、商人あり、農夫あり、醫者あり、神官ありき。就中草野潛溪、平野深淵、森省齋、西依成齋、藤崎丸山、赤松助次郎、佐田谷山、中村忠亭、栗崎履齋、西村作左衛門、行藤志摩守、古永常陸最も名あり。

草野潛溪(一七九六歿)名は雲、字は士龍、雲平と稱す。佐藤愼菴の長子なり。退野甚だ彼れを愛せるが如く、書翰中雲平の教育に關すること屢見ゆ。彼れ文學は勿論、能筆の譽高く、重厚簡默、外貌忠なるが如くにして、實は聰慧、未だ曾て疾

言遂色せず、實に古學者の風ありきと（武森長平著熊本藩文教）。明和三年時習館助教となる。退野歿する前二年、秋山玉山侍講となるや、此の時退野書を門人履齋に寄せ「殿下文字御好の旨、先に承申候、玉山時を得られ候と存候、爲己の學は天下寥々たる由、左可有之候、其上に徂徠學流行と承候へば、我輩は抱脛伏窮山候事、當然の勢にて御座候」との嘆聲を洩らせしが、その歿後門人潜溪助教となり、彼れの學を藩校に教ゆ。木村某の草野潜溪傳に一つの佳話を傳ふ。曰く、

會津屋孫兵衛云は名高き傲富なり、或時此翁（潜溪）の申されけるは、汝に黄金若干貫を返し與ふることはべるなり、こりて給へかし申されければ、孫兵衛大に驚き、こはいかなる仰言かな、君に金貸申したりしこも夢にも覺えず云、翁さな云そ、予が亡師退野翁いそ貧しかりけり、何時の比にか有けん、汝より金かり申されたるこもの侍るめり、終に臨み給ふ時申

されし言に、予が玉の緒もやがて絶ぬべし、心安く終るべし、只事の心に懸るは、先の比孫兵衛へ金借たるこも侍るなり、彼も今は忘れやしつべけれども、返さざるこそ念なし申されしを、若かりし時傍に聞居たり、あはれ世にも出で時にも逢なば、かほごの金は吾よりも返すべきものをこ思ひたりしぞかし、賢も雨露の裏深く、家に餘る黄金若干を蓄へたり、我返し與ふるに非ず、亡師の返し與へ給ふなり、こぞ申されける孫兵衛は彌々色をかへ、譬令亡師の世に在給ふとも、心に覺なき金子を返給ふにて、取べきこわりやある連、あながちにふせぎて返したるこぞ。

と。會津屋孫兵衛も退野の門人なり。

平野深淵（一七五七歿）は元田東野の所謂東肥兩夫子の一人なり。名を時成、字を仲龍、權九郎、號を孤雲とも云ふ。若くして退野の門に入り、易を學びて深奥を極む。著はず所程易夜話、程易雜話等あり。退野が彼れを潜溪の師に推薦せる次の書面は退野の深淵觀を現す。曰く、

貴様にも御存知の人に候へ共、以前に違ひ拔辭の進御座候、私見及申候、近來は程朱の學に力を用、内に向の意切實にござ候、此故に中庸の中和の味も的當の體認にござ候、其意味に鄙見相合申候、其志伊尹を慕申され候、此處も實に相見え申候、其上に易程傳を信じ、三四年も熟讀にてござ候、此故條理も活、當世の務にも通じ申され候、書生の論にてはござ無く候、如此の人は外には見及不申候、當時有學の賢者なるべしに鄙意には信じ申候、近日御對談候て、鄙見誤なるや當るやを御試みなさるべく候云々、

森省齋（一七七四歿、省は又昌、尙とも記す）名は祐望、一に久大、石見と稱す。玉名郡江田村熊野宮の社司なり。二十歳の頃より退野の門に入る。第一の高弟にして、その學深淵の上にありと云はる。退野歿するに臨み、門人を彼れに托す。會讀の日には熊本より馬に乗じて來る者あり、社前の杉埜に繋ぐ所の馬十四五頭二十頭に及びし時もあ

りきといふ。（武藤嚴男著續肥後先哲偉蹟卷三）退野語録及び西依答問は省齋の録する所、共に寫本にて傳はる。

西依成齋（二七九七歿）、初の名は正固、字は潭明、後名を周行と改め、儀兵衛と稱す。玉名郡高瀬村の人、初め退野の門に入り、二十一歳の時上京して若林強齋の弟子となる。京都に住して帷を垂れ、墓は京都歌の中山清閑寺に在り。西依答問は省齋の録する所なり。寶曆五年正月同門の草野潛溪時習館に出仕することとなりければ、省齋彼れを自宅に請じ、偶歸省中の成齋及び同志數人を招く。該書はその答問の記録にして、主に成齋と省齋との問答なり。潛溪の序文あり。問答の一節を見るに、省齋曰く、

足下久しく吾老翁（退野）に従事し給へば、俗儒眞儒の分ち定めて分明ならん、併惜らくは若年にして老翁に別れ給へば、いか程に聞へられ候や。無心許こそ候

へ、今幸にして相會ふ事を得たれば打明て講學に及た
くこそ候へ、先老翁の學いかゞ見及ばれ候や。

西依曰く、

世の學者は只記誦詞章にミヅまりて其上の事はなく、
かゆき所に手のミヅかぬにて候、老翁の學は其得る所
記誦詞章にミヅまらず、加此かゆければ如是手をやり
かき候ミ申程にて候。

省齋能こそ見及び給ふものかなと之を稱す。讀西
依答問説は弘化四年正月元田真孚の著はす所、西
依答問と共に退野の學を窺ふべし。

中村感齋（一七五九歿）初の名は持實、後正尊、
忠助と稱し、忠亭と改む。退野の門に入りて、實
踐の學を爲し、著書に人倫大意あり。習學の際退
野教示の大意を記せるものなり。栗崎履齋（一七
八一歿）名は時亮、字を士欽、善右衛門と稱し、
又龍溪とも號し。致仕して一枝と稱す。二十歳の
時退野の門に入り、後儒學教授奉行職となる。亦

松助次郎（一八〇九歿）は王名郡山田村の農夫なり
幼少より學を好む。傳へいふ、「幼時毎朝馬草切に
行きしが、草を刈らずして土手に腰打掛け書を讀
み居たり。近隣の同輩、自身の草を刈終て後、今よ
り助殿の草を刈らんと相共に刈て遣し、を持歸り
しとぞ。」〔續肥後先哲偉蹟卷五〕前原丈軒、西依成
齋に從つて學び、後退野の門に入り、勤學老に至つ
て怠らず、誠に篤學の人なり。藩主屢之を賞し、
文化四年十二月（八十九歲）惣庄屋直觸となし氏を
稱するを許し、毎年米五俵を下賜す。享和二年「高
本慶藏より學校方御奉行衆中への書面」に左の文
字あり。以て彼の篤學なりし事を知るべし。曰く

右助次郎ミ申者、壯年の頃、大塚退野門人にて學問仕
及老年候ても無退轉、先師の教訓を篤實に相守申候儀
農民には無比類、奇特の者にて御座候、依之時習館出
席の面々も折々罷越致對面、益を得申候事多く、教導
の一助にも相成候云々、

と。退野の師友及び門人の重なる者は以上の如し。他の門人傳は之を省く。

五

退野の著、撰、輯にかゝる書に、批大學會解、

批論語會解、君子重習錄、紫陽言仁要錄、「よめのしるべ」、竹馬歌あり。遺稿を蒐集せるものに孚齋存稿、孚齋存稿拾遺あり。批大學會解、批論語會解は清人來木臣著四書會解中の大學及び論語會解の批評なり。前者は享保十二年の著述なり。二書共に寫本にて傳はる。君子重習錄は元文四年の撰述にて、論語より三十五章、孟子より十九章をとりて小冊子とせるものなり。君子重習錄と名づけたる所以に就きて自ら云ふ。「伏惟、明公公務之餘力、熟讀玩味之、以致反復重習之功、則必應有所得、既有所得、則於輔君從政守身之道、未必無小補云」と寫本にて傳はる。紫陽言仁要錄は朱子の著仁說

一篇中より數十條を抄録せしものなり。仁說一篇は精切緊要、固より學者に益ある書なれども、卷帙浩穰にして猝に見る能はず。故に之を抄録して初學者の一助とせるものなり。名義、滋味、其理惻愷兼四端、仁恕之別、仁與人合、仁公之分、識得仁體、仁包義禮智、求仁之義、求仁說有差、道之本領與學之綱要等の篇あり。門人中村正尊校の版本あり。寛保元年十一月の自序、寛政四年仲春正尊の跋文あり。「よめのしるべ」は寛保十一年娘とよ子を田中某に與へし時、嫁の心得として書き與へたるものなり。一、君子につかふまつりやうの事。一、君子の父母につかふまつりやうの事。一、身のまもりやうの事。一、身のたしなみやうの事。一、召仕の男女あはれみやうの事の五ヶ條を擧げ丁寧反覆す。忠厚の情講然掬す可きものあり。

君子につかふまつりやうの事に於ては先づ冒頭

に男は陽にして尊く、女は陰にして卑しきが天地の道なれば、これによつて常に夫を敬ひ、夫に従ひ苟にも夫を侮り、輕することあるべからずと教ゆ又陽陰和して萬物生じ、夫婦和合して子孫繁盛す夫婦和合の秘訣は尊と従と睦と和となり、此の四ツ備はれば家整ひ、子孫繁盛、身安く心樂し、嫁は此の四徳を失はざる様努めざるべからず、此の四徳は誠に女の天性なり、只いかり、うらみ、しつと、おこたりの四ツに依つて損はる、故に努めて此の四病を去らざるべからずと誠む。曰く

一つにいかりはらたつこ人ごになきこはなけれども、かろきうすきのあり、おもくあつきあり、かろきは少しく心にきざせごも色にあらはれず、うすきは色言葉にあらはる、ごいへごもそのま、きへてあごなくかろきはなきにひこし、うすきは外は見ゆごいへごも物に害あるにいたらず、重きは言葉にあらはさぬごいへごも色にあらわる、あつきは言葉あらく、いふまじきごをいふて氣ふさがり、あごさきのかへり見もな

くて、わざわいをまねくなり、もしさなくごも心にこもり、一日二日はつねならぬこ、ろあひあるも、あつきの類なり、さて何故はらたつごごいへば、我にさかうよりおこる事おほく、此もきをふかくかへりみて、そのもきをふさぎ、念慮のきざしに心をつけて、はやくはらひ去べし、すこしも胸中に置くべからず。二つにはうらみいきごほり、是は大やう我にあひらしからず、我にへだて意ある時にうらみの意出來なり、是大なる悪心なり、およそ人の世にすむに、我ご我をくるしめて胸をこがし、身をあやぶめて一時の安きこ、ろなきは、此恨のこ、ろあればなり、家の内に一人うらみの心あれば、其家不和にしておさまらず、女の人の家にゆくは、家をご、のふるたすけなるに、かへつて我故に家不和になごなるは、其罪のがるべからず、此故にいかなる無理なるごありごも、恨みの心もつべからず、あまさかさまの事ありごも、我心ごおこなひごのミツかぬ故にぞかくあるらめごわが身にかけりみ我たらぬごをつごめおこなふべし、此ご眞實あらばなきかは人をもあわれご思はせざらん、もしもうら

みの心ふかくば、君子にすてられ、舅姑にくまれて身のわざわひ立たころにきたらむぞかし。三つには嫉妬あやまねたむのこ、ろ露もあるべからず、其故は夫の妻をむかふるは子孫をまうけて先祖のまつりをつがしめはんじやうのためぞかし、しかるに妻たるものしつこあれば子孫出生せず、まつりたへぬるたぐひおほく、然れば人の家をほろほす大なる非科とが成なり、そのみならず、しつこのこ、ろあれば、家内さわがしく、其身も常に安からず、此故に聖人も妬あればさるべしこの御おきてあり、すこしも此あしきこ、ろをもつべからず、若おもこ人なきはらめる事あらば随分いたはり平産さすべし、子生ればよく養ひそだつべし、或は世のきこへをはぐかり、小産なきせせんこのはからひありごも必ず申止めて平産さすべし、それもかなひがたくは、舅姑にねんごろにこひ申べし、扱又召仕ひの者の年々密通のなきやうによくく制しましむべし、是は嫉妬にてはなくかへつて君子の爲にはかるなり、世の女は我夫にのみしつこして、家内男女のみだりかわしきをゆるすはさかさま事なり。四つにおこたり

是は君子のおほせ事をおろそかに、又我なすべきわざをのびくにして心ま、なるふるまひをいふ、此おこたりはさしつけて害あやまは見えぬごも、此まめしげなく氣隨なる心が常とこなりぬれば、後に害いでき、家いのふらぬものなり、よくくつこめておこたるべからず、およそつこめおこたらぬは、上一人より下萬民までなくてかなわぬ事にて、婦人の身にかぎらぬご、女は内にのみ居ておこたりやすきものなれば、こりわけ心をつけてつこむべし、或は君子のいつくしみをうれば、初つ、しみしこごもをわすれて、なれくしくなるはいやしき女のくせなりご、是をよくわきまへ、よくつ、しみて、なれく敷ふるまひあるべからず、

ご。君子の父母につかふまつりやうの事に於ては夫の父母を我生みの父母と思ふて孝養を盡さるべからずと戒む。「孝行の品多しと雖もつゝめていへば、よくいとおしむと、うやまふとのふたことにとゞまれり、此心をもとゞして萬事仰のまゝにしたがふ時は、必ずよろこび給ふべし、父母より

こび給ふにいたりて孝行のしるしとすれば、若し御心にかなはぬ事あらば、身をいくたびもかへり見て、孝行のたらぬをせむべし」と教ゆ。身のまもりやうの事にては、女は一旦嫁せば貞操を堅く守らざるべからず、平生貞操を堅く守る女を貞女と云ひ、變に遇うて死すど雖も尙ほ節を守るを烈女といふ、夫死して寡婦となりて後も此の道は堅く守らざるべからず、然るに夫の生存中他と通するが如き者もあり、これ畜生の業なり、呉れくも注意し人の疑を受けざる様すべしと教ゆ。身のたしなみやうの事、これは前の條々に比すれば稍輕しど雖も、この事に心を留め努むれば、自然心も直く、身も壯健になるべしと教ゆ。退野は第一に女は身の嗜の必要を説き、これは夫を尊び身を慎む爲なりと説く。曰く

あさいして癡顔を人に見すべからず、けはひし髪ゆふこゝろ一日もおこたるべからず、およそけはひせぬは病

こおもき喪ある時となり、其外に君子他國なごにこふ留のまなごはせぬよしなり。是等も舅姑の仰あらばそれにしたがふべし、女のけはひし、かねつくる事人によく見られんごの爲にはあらず、夫をうやまひ身をつ、しむのいはひこごなり、世の末になりては、だてにするこご、心得て、家に居る時は大やうにて、門より外へ出る時、一きわけはひかみかたちまでも念を入れてかひつころふ事こそあましましきわざなれ、心あらん人は夫をかるしめる女なりごこそいふべけれ、外に出るごも常さまよりごごなるかひつころひすべからず。

と。次に界女の區別を正ふすべき事を教へて曰く、

古は男女の別ち正しからしめんご、男女手つから手わたしに物をわたさぬ法なり、今ごても何ごぞ手わたしせぬやうにありたきごごなり、下に置てか何ごにのせて、うけごりわたしすべし、是も舅姑夫のほかの人に對しての事なり、祭や喪や火事なごの時、きらひなかるべし、是も舅姑の仰あらばそれにしたがふべし、

今の世の酒の座にて男女打まじり、老若こなくさかつきこするならひなり、是等も世りならわしにて、舅姑の御差圖ならばいなび申まじ、さなくばかならずかたく、外の男子こ益こすべからず、すいぶん念比にここわりを申べし、殊に出家醫者座頭なきにはこりわけ益さすべからず、

と。「殊に」以下面白し。召仕の男女あはれみやうの事にては、召仕はれて足らぬことあるものなれば之を責めず、よく教訓すべし。命令を聞かざる時も怒るべからず、憐みて使役すべしと教へ、一首の歌を添ふ。

己が善きに人の悪きがあらばこそ

人の悪きは我が悪きなれ

以上は「よめのしるべ」の概要なり。近藤淡泉(昌明)跋文を書き、當時婦道の類れたるを慨し「苟くも此の言に従へば則ち婦の三徳修むることを得べく、治教の本、舜倫の道皆此の中に存す」と述べ

「此の書は家毎に寫し傳へて、閨房の遺訓とすべく、當に閨里のみならず、天下に施すべきものなり」と云ふ。

退野は娘のい子を藤崎丸山の子源太夫に娶す。

丸山名は正治、作左衛門と稱し、退野の門人なり。或時るい子より退野に近狀を報せしが、退野之に答へ、且つ夫・舅に對するつとめを教ゆ。「よめのしるべ」と共に女子教育の參考となるべし。曰く

誠こ申も二心なく夫に身をゆだね候處に極り申候、此所皆人あしく取ちかへ、我よく仕へても、かなたに恩愛なければ、はなれしもここわりのやうに覺へ候、孝子忠臣貞女なきをも、父母君夫順なるに誰か孝忠貞を失ひ候はん、たゞに不順なるにむかひ候てこそ、其誠あらわれ候より、其名も聞へ申候、此故に御父のごこくおもひ定ては、たこひ恩愛なく身はくちはて候とも父母の家に歸らぬが道なりとすこしも疑なく、我を捨てあるじを敬愛いたし候處こそ誠の心こ申候、此故に忠臣不仕二君、貞夫不見兩夫との金言もある事に候

と。かく心定まり、二心なく夫婦和合せざるべからず、夫の恩愛薄きも、家の爲め、舅姑の爲め、子孫の爲めと思ひて忍ぶべしと教ゆ。又夫婦の間に秘密あるべからざるも、男は大事を語らざるも可し、女は細大となく告ぐべしと云ふ。曰く

夫婦の中は何事もかくさぬ道にて候と申事は、夫婦一體の道理にて候へば、我一身にて見るに何か隔て候事にてこれなく候、一體と申内に、夫は天に比して貴く婦は地に比して賤敷候故、夫の方よりは妻に大事の談合をばしらせぬ事も其道理にて候、婦の方よりは何事の大切なる事もかくさぬ、その道にて候

と。退野の娘を戒むること以上の如し。るい子よく婦道を守り、一家和睦繁盛す。木山直平の「退野先生ゆい女に贈り給ひし文の跋」に次の事を語る。

娘ゆい女藤崎丸山の嫡子源太夫が妻とす、然るにゆい女艶色なし、源太夫も若き比なれば、夫婦の中睦しか

らず、外に妾を養て室を異にす、然れどもゆい女は其舅姑に事へて定省の務怠らず、夫に事ふるに夫の禮を專にして源太夫の寵なきをも怨みず、斯て事年月を重ね、自然と一家其徳に和して睦きこと他に越たり、妾もゆい女に事るに主の禮を以てせり、ゆい女の徳の斯やんことなきも先生の徳の及べるならん、誠に内に嚴父兄なく、外に嚴師友なくして徳を爲せる者はあらじと正献公の言宜なる哉。

この手紙及び前記「よめのしるべ」は廣く世間に讀まる價值あるものと思はる。勿論直ちに移して現代に行ふ能はざるものもあらん。然れども婦人この心得を以て日常に處すれば、誤なきに庶幾ん。退野は和歌は元來遊戯に非ず、勸善懲惡に用ゆべきものなりとなし、教訓歌を作つて朝夕兒童に歌はしめ、その間に勸善懲惡を教ゆべしと主張す曰く、

和歌はから國の詩のごとし、世の民みなよくそのころを得ば、勸懲の益いかでかなからむ、されば上古の

歌を見るに、いまだ耳目のもてあそびをなさず、たゞ教誡のはしむるを貫之もいへれ、しかはあれど、ちかき世はその道たゞ衣纓家のわざとなりて、下ざまにはおふやうしらず、ましてわらべなごのふるきうたき、たるは馬の耳ふく風のごとし、其歌みなご葉うりむねごふければなり、ご、にひそかに思ひ見るに、今の世にい、ならわせるご葉もて、下さまの人の耳に近く教をうけてうたつくり、兒童のすじなきごごごにかへしめなば、いさ、か教誡にたよりやせん、何によりてかしかおもふ、和歌は唐國の詩のごとし、宋

伊川の何がし周詩をいへらく、いわく、其詞簡奥にして今の人さごしやすからず、別に詩つくりて童子にをしふる酒掃應對等の事をいひて、朝夕是をうたはしめばたすけあるべしごなん、是わが思ふごころなり、しかれば我國にしても、そのご葉簡奥ならで、彼おろかにいやしきが耳にちかき歌あらば、童子にたすけなからうめや、われおふけなく、伊川のご葉のしたわれ侍りて、たゞにはやみがたくおほへ侍れば云々

と。百〇三首の和歌を詠じ、附近の兒童に教へ、

跳ね廻り遊ぶ中に之を歌はしむ。即ち竹馬歌、これなり。かゝることは兒童教育上確かに有效なりと信ず。五首を抄記す。

見るやいかに鳥たにおやにむくゆこても、かの魚をばはごぶありさま

つかへては何はおもはずきみのため身をたくしてご忠ごいふべき

しれや人われにはよきも父母のめでぬ妻をばすつるならひせ

友ごちの中はかりにもいつはらでうやまふご、る常にわするな

君ご父オヤにならべてあがむべき人はわがものならふ師にぞありける

孚齋存稿三卷は退野の遺稿なり。天保・嘉永の際

米田・横井・萩・元田等退野を慕へる肥後先哲の輯録せるものにして、洩れたるものを岡田康治氏集録す。孚齋存稿拾遺これなり。共に武藤巖男氏編

肥後文献叢書第四に收む。退野の學説、詩文、書

翰等を載せ、學説には中和説、體驗説、藤樹學意辨、仁義之名、仁説等を收め、前記の竹馬歌、「よめのしるべ」は孚齋存稿卷二に在り。學者就いて見るべし。

退野は「信」は學問の命脈なりと云ひ、聖人の教を信用するが學問なりと論ず。孚齋存稿所載の體驗説は「信」とその必要を説くこと明なり。その一節に曰く

其信心は則聖人の教を信するこゝろの骨に透りて二つなき味にて御座候、此信心立候得者、世間の毀譽得喪貨色生死其障礙をなすこゝ能ぬ位有之候、此故程子も信道篤則行必果と説れ候得、此信心が學問の根本、人身の主宰是に過たる事無御座候、然るに聖人の教博く御座候を悉く信じ行はん事は、晩學の者及ぶべからざる疑御座候、是未信心の開けぬ故にて御座候、聖經を信するこ申は心の全體にひつすべて信する實心にて御座候、此實心有りて後、聖人の書に記し置れ候一言半句も其信心にうけがひ候が、早學問の實地備りたるに

て御座候、孔門の弟子孔子に問答めされ候事、其身に受用候處に至ては數言に過ず候を終身の業にめされ候事論語に見へ申候、然ば今も又聖人の語の已に切なる處を擇出して信を篤ふして守り候はゞ、善は日々其中に生じ、惡は自ら退去て、人倫正敷國家治平なるべき事必然に御座候、此意味を能信ぜずしては、學問と申聖經を讀候ても記誦の學と申て、人道の用になり不申候、如是信心有之候上にてこそ、好學と申つごめ有之候、故孔子曰篤信好學守死善道と御座候、能々此旨を反復明辨被成候はゞ、言外に此説の虛妄ならざる事を御得心可被成と奉存候、

と。退野は「信」の必要を力説するに甚だ努む。愈以前日天日は聖明なりの語を御信と被成候をはしに被成、聖人の語を御信篤被成候様に奉願候、古人の學は直に聖賢につかへ其教を信受仕より外は無之と承申候、論語の上にては此趣此味見入申候聖人の一語を信得仕、其旨を日用の間に無間斷功を用候へば、是が本となり候て、夫より千言萬語

をよみ申は、己が心を開明化候益と罷成申候、畢竟理明らかに疑ふ處なく信立候へば、行ひがたき事は無之と古人も申置れ候、此事自分に試申候に如此御座候ゆゑ、又々申上候とは平野九郎右衛門に與へし書面の文なり。又履齋に答へし書に曰く、

自身信じ、其餘に人の信も開發有之候、人の開發なきは自ら信の不足所云々、

と。又同人に與へし書に云ふ。

勸 學 院

一 私學勃興の機運と其盛衰

天智天皇が、我國民の風俗を調へ、徳性を養ふ

誠に義利之辨者聖門之第一義たる事は往々學者も口に藉候得とも、其味を不會候者、信立不申、力を用候事不叶して、俗中を挺出いたし候事不能して、郷人たるに終るもの多御座候、可憤事に御座候。

右一篇を草するに當り、武藤殿男氏の好意に負

からず、記して感謝の意を表す。(大正二〇、二〇、二八)

文學士 松 野 遵 崇

には、文學に若く無しとの御趣旨にて、學校を創設せられた事の、懷風藻の序に見えてゐるのが、我國に於ける學校建設の記事の最初のものである。